東京消防庁広報テーマ（２０１１年１１月号）

１　暖房器具とエアゾール缶等による事故をなくそう

冬の生活に、暖房器具は欠かすことのできないものです。近年、暖房器具も多機能、高機能化され、真冬でも快適な生活を送ることができるようになりました。

東京消防庁管内で平成２２年中に発生した火災５，０８６件（治外法権を除く。）のうち暖房器具に関連する火災は１２７件で、全体の２．５％を占めています。器具別にみると、電気ストーブ等による火災が９５件（前年比１０件減少）、石油ストーブ等による火災が１９件（前年比１９件減少）、ガスストーブ等による火災が１３件（前年比４件増加）でした。そのほとんどが、可燃物の接触や使用中の給油など、不注意や誤った取扱いによるものでした。

また、平成２２年中のカセットボンベ・エアゾール缶に関連する火災発生件数は、１７６件（前年比３１件減少）で、最近５年間で平成１８年に次いで少ない発生となっています。

暖房器具やカセットボンベ・エアゾール缶からの火災を防ぐためには、まず、これらの火災の実態を知るとともに、取扱説明書などをよく読み、器具の正しい取扱いや管理をすることが大切です。

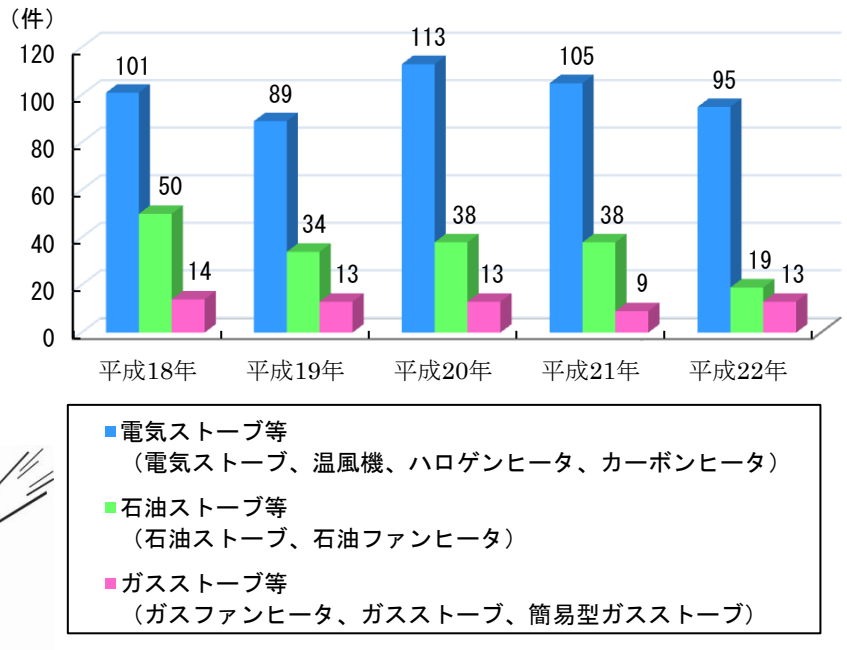
暖房器具やカセットボンベ・エアゾール缶の使用頻度が高いこの時期に、安全な取扱方法についての知識を深めましょう。

⑴　主な暖房器具を出火要因とする火災の発生状況

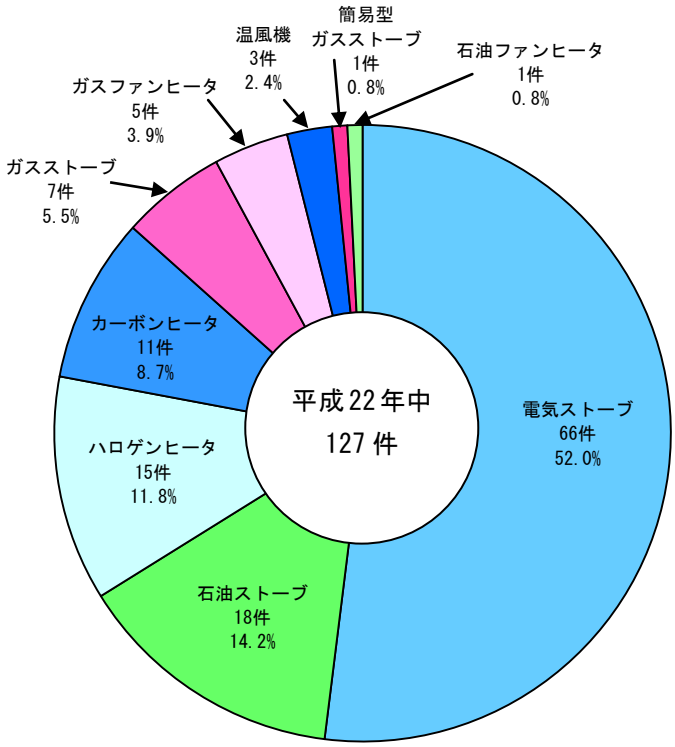
主な暖房器具による火災の発生状況（過去５年間）グラフ１、及び主な暖房器具による火災の発生状況（平成２２年中）グラフ２をみると、電気ストーブ等が最も多くなっています。

電気を熱源とする暖房器具は、取扱いや維持管理が容易であること、ガスや石油などの燃料を使用しないため空気を汚さない、給油の手間がないなどのクリーンなイメージから、手軽な暖房器具として広く使用されていますが、使用の際には、周囲や上部の可燃物、機器やコードの損傷等への注意が必要です。

グラフ１　主な暖房器具による火災の発生状況（過去５年間）



グラフ２　主な暖房器具による火災の発生状況（平成２２年中）

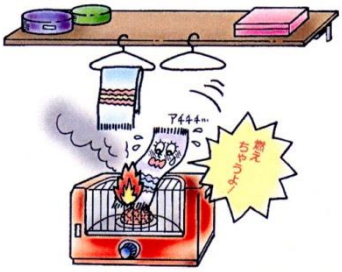


⑵　暖房器具の出火に至った経過

平成２２年中の主な暖房器具の発火源と出火に至る理由（表１）をみると、機器的要因よりも人的要因が圧倒的に多くなっています。「可燃物が接触する」が６１件と最も多く、次いで「引火する」が１２件、「放射を受けて発火する」が１１件などとなっています。使い慣れた器具でも周囲に燃えやすいものがないかなど常に注意する意識をもつことが大切です。

表１　主な暖房器具の発火源と経過（平成２２年中）

主な出火原因		出火に至る理由 合計	可燃物が接触する	引火する	放射を受けて発火する	可燃物が落下する	可燃物を置く	使用中給油する	半断線により発熱する	金属の接触部が過熱する	トラッキング	その他	不明
合計		127	61	12	11	8	5	4	3	3	3	15	2
電気ストーブ等	小計	95	56	－	10	6	4	－	3	3	3	9	1
	電気ストーブ	66	41	－	5	6	4	－	1	2	1	5	1
	ハロゲンヒータ	15	10	－	3	－	－	－	－	－	－	2	－
	カーボンヒータ	11	5	－	2	－	－	－	2	－	1	1	－
	温風機	3	－	－	－	－	－	－	－	1	1	1	－
石油ストーブ等	小計	19	2	4	－	2	1	4	－	－	－	5	1
	石油ストーブ	18	2	3	－	2	1	4	－	－	－	5	1
	石油ファンヒータ	1	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ガスストーブ等	小計	13	3	8	1	－	－	－	－	－	－	1	－
	ガスストーブ	7	2	3	1	－	－	－	－	－	－	1	－
	ガスファンヒータ	5	－	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	簡易型ガスストーブ	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－



⑶　暖房器具からの火災を防ぐポイント

ア　衣類などの可燃物の近くで使用しない

・ストーブの上で洗濯物を乾燥すると、落下した時、火災となるおそれがあるのでやめましょう。

・カーテンや衣類・布団・ふすまなどのそばでは使用しないようにしましょう。

イ　エアゾール缶などをストーブ・ファンヒータの上やそばには置かない

・エアゾール缶などをストーブやファンヒータなどの暖房器具の上や近くに放置していると、放射熱で過熱され、缶の内圧が上昇して破裂し、漏れたガスに引火するおそれがあるので絶対にやめましょう。

ウ　寝るときや外出するときには必ず火を消す

・布団などが接触して火災となるおそれがあるので、寝るときや外出するときは暖房器具のスイッチを切る習慣を身につけましょう。

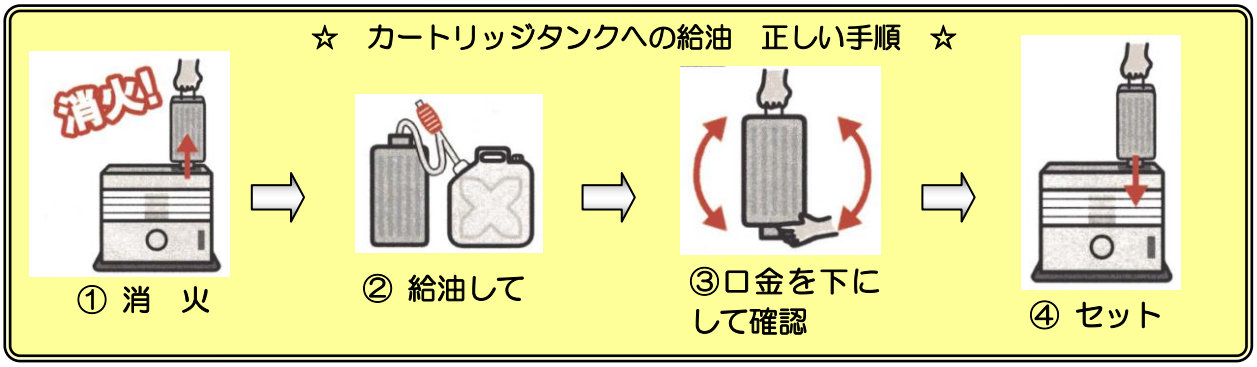
・電気ストーブ・石油ファンヒータは、長期間使用しないときには、誤ってスイッチが入ることを防ぐためにコンセントを抜きましょう。また、収納するときは、電池を抜きましょう。

エ　石油ストーブ等のカートリッジタンクの口金は確実に締まったことを確認してからセットする

・給油時は必ず消火し、火が消えたことを確かめてから給油しましょう。

・カートリッジタンクへの給油は、石油ストーブ等とは別の場所・火気のない場所で行いましょう。

・給油後は、火気のないところで一度カートリッジタンクをひっくり返し、カートリッジタンクから灯油が漏れないことを確認してからセットしましょう。また、漏れてしまった油は、よく拭き取りましょう。



⑷　一酸化炭素中毒の防止対策

暖房器具による一酸化炭素中毒の事故に注意してください。一酸化炭素は、石油やガス、炭などの不完全燃焼により発生しますが、無色、無臭のため、発生しても気がつきにくく、また、血液中のヘモグロビンと非常に結びつきやすいことから、少ない量を吸入しても血液の酸素運搬能力が著しく損なわれ、酸素欠乏状態となり、最悪の場合には死に至ることもあります。

一酸化炭素中毒は、充分な換気を行うことで未然に防止することができます。室内において石油ストーブやガス器具などを使用する際は、換気に十分注意してください。

⑸　エアゾール缶等に関わる火災及び事故※1の発生状況

エアゾール缶及び簡易型ガスこんろ燃料ボンベ（以下「エアゾール缶等」という。）による火災の過去５年間の年間平均は、１８７件で、平成１８年から平成２１年にかけて増加傾向にありましたが、平成２２年では前年に比べ３１件減少し１７６件となりました。

また、平成２２年のエアゾール缶等による事故は、１９件と前年に比べ１２件の減少となりました（図１）。

火災に至った主な要因で最も多いものは、最後までガスを使い切らずに、ごみとして捨てられたエアゾール缶等が、清掃車の荷箱内で圧縮された際に残存ガスが噴出し、ごみを圧縮時に発生した火花が引火し火災となるもので、過去５年間に５９７件発生しました。（表２）

事故に至った要因で最も多いものは、穴あけ（廃棄するためにエアゾール缶等に穴をあける行為）に

よって残存ガスが噴出し、近くにあった厨房器具や暖房器具の炎が引火しやけどを負うなどの事案が過去５年間で３７件発生しています（表２）。（※１「事故」とは、火災に至らなかったがやけど等を負ったもの）

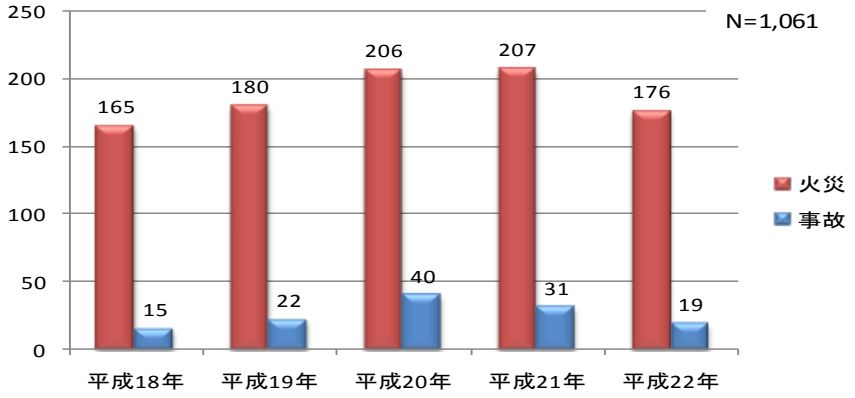


図１　エアゾール缶等による火災及び事故発生件数の推移（過去５年間）

表２　　エアゾール缶等による過去５年間の火災及び事故の主な原因別件数

火災件数	合計(件)	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年	平成 22 年	割合(%)
清掃車	597	113	119	134	127	104	63.9%
穴あけ	101	14	17	26	21	23	10.8%
その他(廃棄)	39	3	2	6	13	15	4.2%
厨房器具近接	50	13	7	8	16	6	5.4%
暖房器具近接	35	6	9	9	5	6	3.8%
装着不良	13	1	1	5	3	3	1.4%
事務器具	9	1	5	1	0	2	1.0%
放火	5	1	0	2	2	0	0.5%
その他(取扱不適含む)	85	13	20	15	20	17	9.1%
火災合計(件)	934	165	180	206	207	176	100. 1%

※小数点を四捨五入しているため合計が 100. 1%になります。

事故件数	合計(件)	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年	平成 22 年	割合(%)
清掃車	0	0	0	0	0	0	0.00%
穴あけ	37	9	7	7	6	8	29.1%
その他(廃棄)	3	1	0	1	0	1	2.4%
厨房器具近接	18	4	5	6	2	1	14.2%
暖房器具近接	8	0	2	0	6	0	6.3%
事務器具	3	1	0	1	1	0	2.4%
装着不良	0	0	0	0	0	0	0.00%
その他(取扱不適含む)	58	0	8	25	16	9	45.7%
事故合計(件)	127	15	22	40	31	19	100.1%
総計(件)	1061	180	202	246	238	195	

※小数点を四捨五入しているため合計が 100. 1%になります。

⑹　近年発生したエアゾール缶等に起因する火災・事故事例

事例１（火災）　不燃ごみを回収していた清掃車がごみを圧縮した際に、ごみの中に混ざっていたエアゾール缶から残存ガスが噴出し、回転板から発生した火花が引火し火災となったもの。

（平成２３年８月　けが人なし）

事例２（火災）　台所においてガステーブルでお湯を沸かしている最中に、エアゾール缶を廃棄するために缶切りで穴をあけた際、噴出した残存ガスにガステーブルの炎が引火し火災となったもの。

（平成２３年８月　４０代女性　中等症）

事例３（火災）　自宅居室内で、冷却スプレーを使用後に、たばこを吸うためにライターを点火したところ、滞留していた噴射剤のガスに引火し火災となったもの。

（平成２３年８月　５０代女性　重篤）

事例４（事故）　自宅台所で調理中に右ひじが痛み出したため、右ひじにコールドスプレーを噴射した際、ガステーブルの炎が引火しやけどを負ったもの。

（平成２３年７月　１０代男性　中等症）

⑺　カセットボンベ・エアゾール缶の火災・事故を防ぐために

① エアゾール缶等を廃棄する場合は、必ず中身を使い切り、各区市町村が指定するごみの分別を守って捨てる。
② やむを得ず使い切らずに捨てる時には、火気のない通気性の良い屋外で残存ガスがなくなるまで噴射し廃棄する。
③ エアゾール缶には、LPG などの可燃性ガスが噴射剤として使われている製品が多いので、使用前に必ず製品に記載されている注意書きを確認する。
④ 簡易型ガスこんろ燃料ボンベは、正しく装着されていることを確認してから使用する。
⑤ 簡易型ガスこんろを複数並べて鉄板をのせたり、燃料ボンベカバーを覆うような大きな鍋等の使用や、練炭等の炭起こしは、燃料ボンベが異常に過熱され大変危険であるため行わない。
⑥ エアゾール缶等は、厨房器具や暖房器具付近の高温となる場所や、直射日光と湿気を避けて保管し、厨房器具や暖房器具等の付近では使用しない。
⑦ エアゾール缶等は、本来の用途以外に使用しない。